



# 東九州支部報



支部忘年会 (16年12月17日) (産山「やまみ」にて)

## 《 もくじ 》

嵐を呼ぶ男再来	1
賑やかに忘年会	2
三宅山へ	3
百貫山への旅	3
百合野山	5
グリーンデソルト・トレッキング⑤	6
犬鳴山	7
私の無名山ガイドブック 24	8
今西錦司⑤	9
お知らせ	10
後記	10

## 祖母山で忘年登山 産山で忘年会

今年も重廣恒夫さんを迎えての、一二月の月例山行と忘年会が、平成一六年暮れの一月一七日(土)と一八日(日)にわたって行われました。歴史的な降雪の一月二月でしたが、この山行も忘年会も雪に恵まれたり、たたられたりの二日間でした。雪づくしの二日間について、西あずさ会員と加藤英彦会員に報告して頂きました。

## 嵐を呼ぶ男再来

(一二月月例山行報告)

西 あずさ

年末の恒例行事となった重廣さんをお招きしての忘年山行が十二月十七、十八日に行われました。今回の重廣さんのテーマは、三つの都道府県が境を接する山を登る「三県境トレッキング」です。目的地は、大分県・熊本県・宮崎県が県境を接する祖母山西方の三国境でした。  
重廣さんと言えば、来県の際に大雨警報や台風、春雪：嵐を呼ぶ男(ちよつと)時代を感じさせる呼び名ですが、さだの、雨男と呼ばれています。が、「ラウンド琵琶湖」では、もっぱら晴れ男と呼ばれているとのことです。大分ではだーれも信じる人はいませんけどね!  
今回も例外無く数日前から県下は冷え込み、雪の情報やチェー

ン規制を耳にするたびに「やっぱり！重廣さん来るしな……」と思った人は私だけではないでしょう。

皆さん十二月ながら、雪に備えたザックを持ってサニーに集合しました。雪道と考えると普通車では心配です。当てにしていた福岡在住の佐藤さんは現地集合で、飯田さんは故障中とかで、四輪駆動車が足りないとは思いつつチェーン携行を確認して大分駅前にも重廣さんのお迎えをしました。

「おはようございます！より」また、雪ですよ！の挨拶が早かったかもしれない。北九州支部の日向さんも一緒でした。

一路北谷に向けて出発です。神原との分岐を過ぎ越敷岳の登山口あたりから雪が増えてきました。「あれ？登山者が一人で歩いてる！」阿南さんでした。ビックアップしてさらに進みます。いよいよ雪道となり五ヶ所チェーンを着け、祖母山の山懐へ入っていきます。「とても大分とは思えない！」そうです、ここは大分県ではありません！竹田からちよこつと熊本県を通り、ここは宮崎県です。

雪に閉ざされた町はとも九州とは思えません！林道にはかなりの新雪が積もり、地面はまったく見ることができません。この先に、佐藤さんと都城の長友さんが本当に待っているのか少々不安になりながら一

の鳥居を過ぎ、登山口の広場に着きました。二台の車には新しいチェーンがついていました。

皆さんヤッケにロングスパッツをつけ、風穴コースを下りに使うことにして、出発です。十二月に、これほどの積雪に会えるとはうれいびつくりでした。どんよりした天候のため周りは何にも見えず、ひたすら足元を見ながら、なだらかな坡道を登るのみでした。二時間弱で目的の三県境に到着しました。



(三県境にて)

ここで、大失敗！母から預かった東九州支部の旗を車に忘れて、「アーあ！何のために預けたん！」とお叱りを受けているところに救世主が現れました！なんと、佐藤さんのザックに東九州

支部の旗が入っていたではありませんか！！いつも入りっぱなし……なんて思っても口には出さず、ありがたうお貸し頂き写真に収めさせていいただきました！

国観峠に向けて出発しようとする「寒いので」と言いながらダウンジャケットを着込もうとして、今回最年少の竹田さんを発見しました。皆さん湯気が出るほどの汗をかいているのに寒いなんて、もしや素肌に綿シャツ？と思いたずねると大正解でした。すぐさま上半身を裸に、ジャージを素肌に着せて再出発「あつたかいです」と言いながら皆さんに追い付きました。

国観峠で引き返す人と山頂組みに分かれ、なおも雪が増える中、山頂を目指します。昼食のために九合目の小屋に向かい、狭い土間でしたがしばし温かい中で昼食を取ることができました。小屋からは樹氷もおみごとで、真っ白い世界を堪能しながら山頂に着きました。残念ながら展望はできませんでしたが、日向さんが担ぎ上げたシャンペンで乾杯、記念写真を撮り下山開始です。

時間が下がったこともあり風穴コースはあきらめ、登ったコースを下りました。雪のおかげで、楽な下りでした。さあ、今夜のお宿は阿蘇の産山です。五ヶ所を過ぎたところで、チェーンを外す車とばらば

(祖母山頂にて)



しました。冬の山行にはくれぐれもご用心を！

参加者：阿南、安藤（幹）、安藤（セツ）、安部、飯田、石川、加藤、茅野、久保、佐藤（秀）、園田、竹田、得丸、遠江、長友、中野、長野、西（あずさ）、西（孝）、日向  
特別参加：重弘

## 忘年会

加藤英彦

らになり、それぞれ産山を目指しました。佐藤車と中野車は最短ルートをとっていました。下りのカーブに入ったとたん、道路はさらさらで「滑りそうだなーあーっ！」佐藤さんは、ルミミラーで道路から外れながら一八〇度回転していく車を目撃しました。私も慌ててドアミラーを見ると、テールランプが光っています。電柱のお陰でそれ以上林の中に落ち込まずに済みました。納車して三ヶ月の新車の運転席の窓は割れて開かなくなりまし。

祖母北谷登山口より今夜の宿忘年会会場の熊本県産山村の民宿「やまなみ」までは、六台の車の分乗しての移動である。道は雪のためスピードを押さえての運転で、途中で日暮れとなり、予定よりだいぶ遅れて二時間以上かかった。途中では、ついてこれなくてはぐれてしまった車や、遠回りをしてようやくたどりついた車、凍った路面でスリップして電柱に接触してしまつた車……。そして、今日ここで合流予定の菅さんは途中、国道五七号線の道の駅「波野」より民宿に電話を入れて迎えに来てもらったとか。

あれやこれやで皆の到着が遅れてしまい、着いてもまずは温泉に入るのが先で、そのあとが

宴会だが、予定時刻がかなりずれこんでしまう。そんなわけで、宿に頼んで時間をのばしてもらうこととして、七時前に忘年会の開始。

例によって長老の安藤（幹）さんの乾杯の音頭ではじまる。テーブルにはさすがは民宿、といわれるような手づくりの料理がならぶ。本日欠席の小竹さんより、重弘さんに差し入れの「泡盛」が披露され、あつという間に空になる。

宴もたけなわになると、出席者一人ひとりの近況報告の時間である。最初に行った人が次の人を指名し、さらに次の人を指名というかたちで順番にすすめていき、全員が終わる。重弘さんにもごあいさつをいただく。やがて翌日の行動予定を確認し、万歳三唱で一次会は終わる。このあと、部屋に移動して二次会で、飲み直しをして終了となった。

いつも重弘さんから参加者に対して、アシックスのTシャツとバンドナのプレゼントをいただくが、今年もいただいた。このTシャツは胸のデザインに日本列島を入れた定番となっているもので、これがもらえるのもこの会に毎回参加する楽しみの一つとなっている。重弘さん有り難うございました。

一〇月に石鎚山に登った際に、このシャツを着ている人と会って、すぐにうちとけて会話がは

ずんだ。やはり重弘さんの追っかけグループで、広島からのパーティーであった。Tシャツ一枚で見知らぬ人とも、交流の輪を広げることができるといいうすぐれものである。

参加者：阿南、安藤（幹）、安藤（セツ）、飯田、石川、加藤、茅野、久保、佐藤（秀）、菅、園田、竹田、得丸、遠江、長友、中野、長野、西（あずさ）、西（孝）、日向  
特別参加：重弘

## 三宅山へ

加藤英彦

二月一日（日）、朝八時半より朝食。ここ産山の民宿部落は売り物を「漬け物」としている。何十種類もの自家製の漬け物が朝のテーブルにならんでいる。漬け物の食べ放題で、好きなものが食べられる。まさにおふくろの味そのもので、その日のうちに食べる漬け物はその日のうちに樽からあげるそうだが、本日の山行の参加者は二名で、車は安藤、中野、佐藤（秀）、園田と四台に分乗しての出発となる。中野車は昨日電柱との独り相撲で、運転手側の窓ガラスは破れ、ドアはへこん

だ状態で、ビニールとガムテープで応急処置をほどこしているが、風が入り寒そうである。園田車にチェーンを付けるのが手間どったりして、出発が遅れる。池山水源を抜けてヒゴタイ公園へと進むも、新雪の上にわだちもなく、吹きだまりの雪の状況がヤバくなってくる。雪の中をなおも強引に先頭の安藤車が突っ込んでいくが、吹きだまりの雪にははまれてついにストップする。そして前進も後退もできなくなる。前方はまだまだはるかかなたまで雪の原。これ以上前進することは無理な状態だ。雪をスコップでかき出して車をバックさせ、Uターンする。

急遽行程変更である。いったん戻るかっこうとなり、県道四〇号を産山村役場前を経由して、県道一三一号を白丹を経て久住町へ出る。途中、園田車はチェーンの状態が悪いのでついて行けないとの連絡が携帯ではいる。久住町の国道四四二号に出たところと協議した結果、時刻も大分さがったことだし、今日の目的の山を花牟礼山から三宅山へと変更することとなる。竹田の道の駅で休憩したのち、城原から近道をして県道四七号に出る。三宅山への道の入り口に着くことで、途中ではぐれていた中野車も合流する。

三宅山（標高七三一、五m）は旧版の「大分百山」に入っていたが、車道が山頂まであり、

車で上れるので「新大分百山」から除外した山である。林道をどんどん車で上って行ったが、せつかくの山行だからと、手前の標高六五〇m付近に駐車し歩くことになった。約二五分の山行である。

山頂からの展望は、北の一部をアンテナが邪魔をしているが、ほぼ三六〇度の眺望は抜群で、雪を頂いて白くなった山々が手に取るようである。傾山、祖母山、阿蘇山など・・・しばし見渡せる山々の説明の時間となった。

（三宅山にて）



下山後は本日の昼食会場へ向かうこととなる。行き先は湯平温泉の「嬉しい食堂」だ。途中から予約の電話を入れ、長湯温泉を経由してやっと一時三〇分の到着。絶品の鯉のから揚げ。そして、ここでしか味わえない

「鯉こい」という美味なつまみ食して再度乾杯となる。

それから大分まで出て三時三〇分に帰着。JRで帰る福岡の日向さんを大分駅まで送り、また来年の忘年会での再開を約して、重弘さんを見送った。雪にたたられた二日間であったが、また久しぶりに雪を味わった二日間でもあった。

参加者：重弘、日向、安藤（幹）、セツ）、飯田、石川、加藤、佐藤、遠江、得丸、中野、西

## 百貴山への旅

ススキをたずねて

（十月月例山行報告）

安部可人

十月二十九日（土）小雨の中、ゆつくり運転の私は一人、三時四十分出発。熊本ICで定刻出発の中野新車サーブと合流。同乗者は飯田、遠江両名。えびのIC、七時二十分到着、長い加久藤トンネルの西方二キロに矢岳高原が広がっていて、百周年にちなんだ百貴山は高原の南東端にある。今月のテーマの花である『ススキ』は、高原のいた

るところに咲き乱れ？（少し遅かったようで枯れススキ）ている。車は高原に上り、公園の入り口を通過し、約二キロ先の畜舎の先に停車。地図ではここから稜線をたどるのが良さそうと読む。八時二十五分出発。雨はもう止んでいる。地図とGPSをたよりに、ヤブに踏み込むが、たいしたヤブではない。緩い山稜を下っていくと、雄鹿がネットに角をからませて死んでいる。あたりはずい腐臭。そのあたりでどうやら稜線をまちがえてるのが判明。右手向こうに百貫山の稜線が見えている。引き返さずにそのまま、植林したばかりの広い山腹をトラバース。こういう所はスズメ蜂が巣作りしやすいと、警戒しながら進む。立派な自然林に入り、小さなピークを超して登ると藪の中に紅



(百貫山にて)

白のポールが見えた。近づくと地図にはないが、なんと無傷の三等三角点がある。

笹を刈りはらって記念撮影（九時二十五分）。帰りは迷わず稜線を近道。途中で樹周四、五mはありそうなタブの大木二本に遭遇。登り一時間、帰りは二十八分、『百』がついていなければの単なる高原上の『丘』の百貫山の登頂はこれで終わり。駐車地点にスズメ蜂の偵察飛行が来襲し、慌ててそこを退散。

その後は飯盛山と栗野岳をめざす。八月の広島のおまけの山と同じに、今回もおまけの山の方が本番だ。自衛隊の霧島演習場の中へ。先を行く中野車は平気でどんどん侵入していく。

飯盛山の南西麓の、演習場境界の林の中に入り口に駐車。ここが登山口らしく、赤い目印のテープもある。十一時十五分出発。荒れたスギ林の緩い斜面、雑草を踏み分けて登っていくと傾斜は次第に急になる。けもの道が縦横に走り、どこを登っても急登。あちこちに目印のテープの乱れつけ。惑わされないようにクロキやシロダモ、ツバキ、ヒシヤカキなどの枝を折って、置いて登っていく。直登に次ぐ直登。標高差二五〇mは楽ではなかった。

地形図でも飯盛山（八四六、三m）はその名の通り、おわんを伏せた形。山頂には旧噴火口があり、小さな窪地となっていて

ている。頂上の一角に登りついて、最初はテープを頼りに右に進んだが、途中で「待てよ・」と立ち止まり、地図を開いてUターン。一二時二〇分、四す



みを無惨に削られた三等三角点の山頂到着。樹林の中の何の眺めもない。平らな山頂に到着。

(飯盛山にて)



缶ビールで乾杯し、昼食。一二時四五分、下山開始。下山では山麓近くでブッシュを避けて演習場内の草原を下り、駐車場一三時一五分着。登り一時間一

〇分、下り三〇分の山であった。次の目的は栗野岳だ。ところがナビゲーターでも道が判然としない。いくつも分岐路のある演習場内で困っていると、何の演習の帰りか、一団の隊員がやってきた。私が上官に右手に見える栗野岳への近道をたずねた。そして教えられたとおりに一旦谷に下ると道は枯れ沢越えのオフロード。私のハイラックサーフは初めて岩越えを体験し腹をこすってしまった。そこで改めて石を積んで道を補修し、新車サーフは泣きを見ずにすんだ。

途中また道に迷ったりしてやっとな栗野岳温泉に着き、さらに奥の登山口へ。途中、イノシシの絵を彫った立派な山の神の石碑（史跡？）などを車窓から見つて、やがて登山口到着。

「山頂まで二キロ、六〇分」とあり。時刻は午後二時三五分。飯田、中野は山頂をめざす。「どこまで行けるか分からないが、四時になったら途中でも引き返す」と言って出発。遠江は休憩。安部は一・七キロ先の展望台とレクレーション村に行き例によって野営出来そうな東屋などを探す。これと思うところを見つけてベニヤ板で風よけ作業などを行う。

その後下山してくる二人を迎えにと、登山口から少し登ると二人が降りてきた。「飛ばして五五分の登りだった。頂上付近

は韓国岳が見えていた。大急ぎで降りてきた」（附記参照）とのこと。時刻は四時一〇分過ぎであった。

早速発見し用意した野営適地のことを伝えると、褒めてくれるかと思ったら、なんと三人とも食糧はまだ買ってないの、ここで野営のつもりではないとのこと。一瞬愕然としたが、とりあえず展望台のレクレーション村に行つて見ることにになり、その雰囲気良好で、飯田氏も私の見つけた東屋が気に入り、中野、遠江は栗野まで食糧の買い出しに行つてくれることになった。

野営の設営も終わり、夕暮れが迫る前に私の飛騨みやげの朴葉味噌で牛肉のロースを焼き、五時二〇分、待ちきれずに早速二人で宴会開始。そうしているうちに買い出し組の二人が帰ってきて、ブタ鍋、メザシ・・・。遠江さんのいつもの手際よい炊事に感謝。私の持参の「松の露」より「伊佐錦」がよかった。にぎやかな宴会は夜更けまで続く。

翌三〇日（日）は、三人は七熊山をめざして、私は白髪岳をめざして二手に分かれて出発する。

参加者：安部、飯田、遠江、中野

# (附記) 栗野岳山行記録

中野 稔

全く予備知識なしに登る事も格別楽しい物である。数年前までは、様々なガイドブックや登山の情報誌を参考に、机上で山頂や様々な風景を想像し、それが予備知識として、携帯するものや装備を決めていた。

栗野岳は、鹿児島では比較的ポピュラーな山であり、登山道もかなり整備されており、夜お世話になった枕木公園ももう一つの登山口として整備されている。

今回は、登山開始時刻が二時半過ぎという事もあり、二人で栗野岳温泉の先にある登山口からピストンをする事になった。

栓の植林の中を黙々と歩き、静けさを堪能しながらもルートの確認は怠らなかつた。町の雑音の中で暮らしていると、つい見失ってしまう大切な物を再確認できたりもする。水や食料、衣服や友人、家や車、家族や会社などである。標高九〇〇メートルを越えるとヒメシヤラやツガの大き木が目を引くとガイドブックにあるが、私には記憶に無い。第一展望台が有つたらしいが、これまた記憶に無い。

標高一〇二メートルの稜線につくと、尾根のピーク(ここ

が栗野岳で一番高いところ)のあたりで北西に踏みわけがある。四等三角点のある北栗野(標高一〇八メートル)への道だが荒れている様子だ。

栗野岳山頂はこの分岐を南東に一旦下つて、ススキ原の中を登つた所で三等三角点が出迎えてくれた。展望は三角点より一〇メートルほど南の地点で得られる。先ほど一旦下る道では見えていた韓国岳は、今は雲に隠れて出てきそうにも無いが、白鳥山はその手前に悠然と横たわっている。

三時間前に登つた飯盛山がかわゆく見えた。この辺りの山々は全て火山なのだが、噴火当時の景色は絢爛豪華の火山噴火の競演だったかもしれない。今は何事も無かつたように静かに行んでいる。

登山口で待ちわびる二人のため急ぎ足で下山した。登り五七分、下り三三分、片道約二キロメートル。

(飯田、中野)

## (後日談) 白髪岳へ

安部 可人

九時に白髪岳登山口出発。高度差三〇〇mながら四キロとは久住観光コースと同じ。庭園のような三池神社を一〇時五三分

通過。あと七〇mがけっこう遠い。昨夜の深酒で胃は痛い。どこも痛い。一、二時一五分念願の白髪岳、一四一六・七m、一等三角点へ到着。単独行、いつも長居は無用。カロリーメイト二片で下山。頂上付近のすつきりした枯木群と五合目の見事なブナの原生林。ここは他にない雰囲気がある。七熊山組は下山後、登山口で霧島山を眺めながら宴会中と中野氏より携帯がはいる。こちらは一人でゆっくりした下山に満足。一時五〇分登山口着

六〇キロ走り人吉城趾前で温泉に入る。二〇〇円なり。もう三時、食糧を購入して四四五線に入る。悪い予感どりに頭地を左、宮園へという迂回路をとる。小鶴トンネルを出て、紅葉の大滝溪谷、平沢津へと初めての道路。暗くなつた。保口岳登山口をさがすが見あたらず・・・、残念。恐ろしくて泊まれないが・・・。

七時やつと久連子入口に出て安心とパニック。なんと、宮園へとあつた矢印は地元車のみに通用。椎原への道も不通。運良く久連子荘のほうから車がきて止める。子別峠方面へ行くとのこと。道はそれしかないという。子別峠に戻つてサーフは停止。飲まない、わびしい夕食。休憩一時間。シカ、タヌキと会うだけの世界。泊まるのが怖い。久連子・落合線を下り、氷川ダム手前、安部ホテルで六時間眠る。

## 百合野山 フジバカマをたずねて

(十一月月例山行報告)

牧野 信江

十一月十三日(日)、午前六時サニ集合。国道十号線を走っていきますと、亀川あたりから豊岡の上の方に、今日の目的の山々が横並びに並んでいるのがよく見えます。別府湾ロイヤルホテルを過ぎたところの信号から左に入り、豊岡小学校横をあがつていき、山田湧水に着きました。そこに車三台を置きました。別の車三台に全員が乗り込んで、長野の集落をあがつていき、鹿鳴越東の登山口に到着しました。この登山口に行く道には、案内板がないのに迷わなかつたのは、いつものごとく飯田さんの先導のおかげです。

登山口には木の札に『殿様道入口・東鹿鳴越道登山口・東登山口・鹿鳴越周遊ルート』といっぱい書いてありました。七時四十分出発。はじめは竹林の中の比較的石の多いなだらかな道をゆつくりと登っていきます。やがて天然林の中の谷間の道となり、少し急な登りになります。途中には『あと一時間で峠』とか『豊前街道跡』など



(百合野山にて)

一旦鹿鳴越東の峠に引き返し、こんどは城山をめざして登ります。平らな峠道を山香に向けて、二、三分行つたところから左のヒノキの植林地にのこの細い道に入ります。これが鹿鳴越の縦走路で、暗いヒノキ林の中の道

を緩く登ると『殿様道』と書かれた標識があります。鹿鳴越東の峠の方へと、今登ってきた方向を示すのもです。

ここから小さな脇道を、左に引き返し気味に山腹を巻くように行きます。ササの多い急な斜面を登りつめると城山です。九時二〇分到着、山城の跡という山頂は、小さな広場の台地で、ヒノキの植林の中です。木の枝の間から別府湾方面が少し見えるだけです。

先ほどの標識のある分岐点に引き返し、縦走路をちよつと行くと小さな峠で、ヒノキの中を下っていくと、平らな道となります。たくさん野いちご(フユイチゴ)があり、グミの実もあります。やがて深い笹の中の緩い登りが続き、道がほぼ平らになると、道の脇に『板川山』の標識がありました。山頂といってもそこは長い平らな稜線の上で、深い笹の中に細い道が続いているだけです。展望はなく、標識の周りは笹を刈って整備されています。

次は七ツ石山に向かいます。少し行くと下りとなり、笹が低くなって展望が開け、由布岳、鶴見岳や別府市、別府湾の眺めが広がります。小さな下りの後、笹の中のちよつと長い登りとなり、登りついたところが七ツ石山です。一〇時三〇分、六二三m、二等三角点があります。名

前の通り、大きな石が七つ?あり、天気も良く、眼下に別府湾、豊岡のあたりがよく見えます。

今日めざす山の花は『フジバカマ』でしたが少し遅すぎたのを見あたらず、かわりに白いきれいなノコンギクや紫色のヤマラツキヨウがたくさん目につききれいでした。

七ツ石山から降りていくと峠道に出て、『西鹿鳴越・ザビエルの通った道』の札がありました。そこから経塚山をめざしましたが、峠の少し先でスズメ蜂の巣があり、危険なので回り道をしました。途中はマユミの赤い実がきれいでした。林道を大きく遠回りして、広城農道に出て経塚山の山頂の下に十一時四十分に着きました。無縁塔の近くのコンクリート道で食事の支度に取りかかります。

今日はここで、キムチ鍋パーティが最初から予定されていて、安部先生の車でコンロや鍋や材料が朝は早くから運ばれていました。鍋にキムチと一緒に安部先生が作った無農薬野菜やいろいろな食材が入れられて、遠江さんの手際よさで、またたくうちに美味しいキムチ鍋のできあがりです。とても美味しく体が暖まりました。秋の明るい日射しの中の、のどかな経塚山にはほかに人影もなく、にぎやかなごやかな山上キムチ鍋パーティです。



(経塚山にて)



来れて、これだけの展望があるのはいいですね。

下山はスズメ蜂の巣を避けて峠へ近道するため、N T Tのアンテナの横から道のない深いササの中に分け入ります。飯田さんの先導、中野さんのGPS参考のヤブコギでした。二時五分、再び鹿鳴越西の峠に出て、そこから山田に向って下ります。日のお城に使った旧石切場があり、広い道に出て二時四五分に西登山口にでました。そこから五分も歩くと山田湧水です。水汲みに来ている人が多かったです。

地元の有志の人たちが立派に整備してくださった道を、のんびり歩いて秋の静けさを十分味わい、キムチ鍋もたっぷり美味しく味わい、楽しい一日でした。鍋パーティの影響で、家で鍋をよく作るようになりました。

参加者：安部、飯田、石川、今山、園田、遠江、得丸、中野、長野、牧野

(ノコンギク)



午後一時、食事も終わり、十五分後にはみんなな経塚山(六一二m)の頂上です。十一月というのにミヤマキリシマがあちこちに咲いていました。今日は天気にも恵まれ、三六〇度の雄大な眺めです。車で頂上近くまで

## グリーンデルワル トトレツキング

(その五)  
八重康夫

九月二二日

午前一時、二時と一時間毎に目が覚めた。結局、三時にはあきらめて起きた。列車は五時五分だからまだ十分過ぎるくらいある。準備しているうち、パリ・リヨンに預けたトランクの鍵をどこに仕舞ったか忘れてしまった。あせった、あれが無いと、税関を通らせてもらえないかもしれない。あせりまくった。ザックとウエストポーチをひっくり返して探したら、ウエストポーチのポケットの奥深くに入っていた。見つかったしまえば、大事なものは変なところに入れるはずが無いと納得するも、大事な試験を受けに行く朝、遅れて起きたときのようなあせり方だった。

五時二〇分ごろ駅に行くと、少しずつ始発の列車に乗る人が集まってきた。やはり日本人が多い。当然、改札口は無く、自由に乗るだけである。インターレーケンに行くことをしっかりと確かめて乗りこんだ。列車の中で、ホテルが用意してくれた朝

食の弁当を食べた。サンドイッチであったが、チーズ・ハムなどの酪農製品がどれもおいしい。インターラケンに着くと乗り換えだ。すっかりベルン行きの列車のホームを確かめて、乗りこんだ。普通列車なのにえらく立派な車両なので、返って不安になる。乗客に思わず、「Foot BERN?」と聞いて、イエスの答えを聞いて安心した。向うは、発車時間と、行く先が大事であることがわかってきた。

日本みたいに上り・下りや行く路線毎に時刻表を分けて書いていず、時刻表に並べている。それはかえって見やすい。出発時間を見つければ、乗る列車の欄を見て、そのホーム番号を見れば、自分の行く所がわかる。あとは列車に書いてある行き先を確認し、駄目押しとして、乗客に確かめる。列車の乗換えがこの日も二度あったが、これの繰り返しである。

インターラケンで、一つ早い列車に間に合ったので、ベルンでの時間が一時間ほどある。ベルンはかなり大きい駅だったのでトイレをしたくなったので探す。どうも中央口から出ずに、端の出口から出たため、トイレが随分分かりにくいところに有りそうである。下手に動き回って道が分からなくなると大変だから、自分の出た出口からあまり離れないことにした。丁度、喫茶店を見つけたので、トイレ

があることを確かめて、コーヒを頼み、用を足すことが出来た。

次は、ベルンからパリへ向かう新幹線TGVだ。時刻板で一番ホームと確認したのでそこに行き待っていた。立派な列車が入ってきて、自分の指定席に乗りこんだ。そのとき、隣がおばあちゃん、だんなさんと二人連れだったのに席が離れている。それがわかったので、自分の席をだんなさんと代わってあげるため、「チェンジ ザシート?」と言ってあげると、「ワンドフル!」と言って喜んでくれた。単語しかしゃべれなくてもなんとか通じるものだ。おばあちゃんはシカゴから来たと言っていた。自分もともと通路側だったのに、窓側に代わられてラッキーだった。

TGVは行きと帰りと二度乗ったが、日本の新幹線のぞみより遅く感じたが、どうなのだろうか。線路周辺に牧草地が多い。ためそう感じたのかもしれない。しかしいろんな所で結構、信号待ち停車のように止まっていた。途中、切符の確認に車掌が回ってきたとき、代わってあげただんなさんの切符を見て、席が違っていたが、自分が「チェンジ!」というのと、にこっと笑って安心したようだった。

列車は、午前九時過ぎ、ヌーシャテル湖岸を走り、ジュラ山

脈の国境近くに来た。地図を広げて、自分の走っている所を確認すると、飽きなくて良い。それにしても自分の隣に座った人（スイス出身といっていたが）はワインを二本、ボトルで注文



(TGV)

し、車内昼食を一時間くらいかけてたくさん食べていた。自分はいえ、昨日余った、お茶を飲み山の行動食を、時々取出しては食べるくらいだった。

国境近くに来ると、三人のかっこいい官吏風の人達が、パスポートを確認してきた。少しヒヤヒヤするが、普通の旅行者と

わかるとなんのこともなく、通り過ぎた。ポントリエからフランスという所で、行きに通った線と合流した。列車は、相変わらず牧草地の中をはしり、一時四一分、少し町のデジョン着。

まだパリヨンまであと一時間四〇分走らねばならない。振動も少なく乗り心地は悪くないが、約五時間も乗り続けるのは、結構飽くし、疲れる。この間、日本の家族達に何度か携帯メールを送った。定刻の午後一時二三分、グルンデルワルトを出て約七時間半、やっと、列車は見慣れたパリヨン駅に着いた。隣のガール・ド・リヨンホテルに行つて、預けていたトランクをもらい、(この預り証も無くさぬようしっかりとしかるべきところに入れ何度も確認しておいた)そのロビーでザックの荷物と、トランクの荷物を仕分けし、機内荷物を選別して、ザックに積みこんだ。

(続く)

## 犬鳴山

西 孝子

一月六日、大分港午後六時五分発、サンフラワー二等レデ

イスルーム、夕食、三連休で若者多し、波荒く、風呂は使用禁止、年賀状書きだ。

一月七日大阪南港八時二〇分着、ニュートラムで住之江公園へ、四橋線で難波へ。

南海本線大阪難波駅の入口はビルの中、前をいく人や店員にと、ほぼ十人に聞き、二五分歩きまわつてやっと発見。

急行で三〇分、泉佐野駅着、午後三時のホテル送迎バスを待つ。年賀状書きだ。五時間駅前のベンチで・・・。

横に集まる七、八人は毎日来る人たちで、ジュースを私にすすめるが、自分のポカリスエットとパンで昼食、寒くて羽毛を出して着る。バスは犬鳴温泉行きが三〇分に一本あり、運転手にホテルを聞いてわからず。駅前をはいかい・・・、待ちくたびれ・・・。

犬鳴グランドホテル紀泉閣、三〇分着く、玄関は五階である。午後六時十二支会も前夜祭である。まず十二支会旗を、十年前私とマナスル四十周年ラルクヤ(五千二百メートル)峠越えをした中谷絹子(奈良)堀義弘(岐阜)の二人である。

三時間私語タイム、飲み、食い、歌う、毎年出る月のさばく(今西先生の好きな歌詞)、ロングロングアゴー、今西先生の顔をもじる、一年間のごぶさたを語る、

一月七日、朝八時、和食わさびづけがおいしい。九時出発。二階の出口より犬鳴川の沢渡り。飛び石をダブルストックで要領よく渡る一番手の見本だ、みんな、おろおろ、手を引き、不安定のあしはこび・・・川ぞいの遊歩道を進むこと十五分で自動車道、これよりすぐに登山口、道幅二メートル。

犬鳴山について（府指定名勝地）

宇多天皇の寛平二年、紀州の獵師が犬を連れて狐をしいた時、樹上に大蛇が現れた。犬は主人の危急を救うために吠えるが、獵師は気づかず、獲物を逃がしたのに怒り、犬の首を切る、する、の犬の首は、樹上の大蛇を噛み殺した。獵師は犬の吠えたわけを知り、手厚く葬った。このことを天皇が知り犬鳴山の号を賜ったという。



六三名の参加者は、奥の院へ。ここは火渡りの行で有名。大きい本殿と、五、六メートルはあ

ろう不動明王の黒塗りの像あり。ここまでは観光客多し。



山伏姿の修行者に「知恵と勇気をください」と握手すれば、みんなまねをする。ここより峰渡りの行場で道細くけわしい。荒々しい岩場、今は登山者が多くジグザグの歩きやすい道あり。五、六回上下する。途中のお宮からは関西空港がよく見おろせ海は波静かであった。

先頭は二人の旗持ちが歩く。十四歳若いので「早すぎる、待って、うしろがはなれてる」と言いつつ、六一メートル大天井の頂上である。

車で林道より上った人が、予定の時間より三〇分遅れで心配して迎えに来る。たき火でのちそうで、山頂祭。還暦二名、古希二名、喜寿二名、卒寿一名へ記念品を渡す。万歳とビールで乾杯。今年は大分出身の佐藤氏の案内（新宮グループ）で、二時間半で山頂。下りは林道十五分組と、来たコース組とに別れ、山頂で別れる。

私はホテルのバスで駅まで行くので林道組へ。自然林と犬鳴川溪谷、岩間を流れる清い水。

大、小の滝、水音やさしく秋の紅葉がいまだに山をそめた所あり。家族でハイキングには最適。特に中、高年には手こるである。峰は七山あり、全部を犬鳴山と呼び、峰渡りの道場である。その三分の一程歩く。



費用  
大分港↓大阪南港：八、四〇〇円  
大阪南港↓別府港：五、四〇〇円  
（往復割引）  
南港駅↑難波駅：四四〇円  
難波駅↓泉佐野駅：二、六〇〇円  
合計：一五、〇四〇円  
（泉佐野〜紀泉閣（小型バス）無料）

私の無名山ガイドブック

飯田勝之

鶴見北尾根の脇道

「花の台の脇道」

鶴見岳は大分市街地の方から見ると、隣の由布岳と『豊後富士』の名を競うほどに端正な、独立峰のかたちをしてるが、別府市街など、東側から眺めると姿形を一変する。

鶴見岳山頂から北に延びる稜線は、馬の背を経て切り立った険しい稜線の三つの峰からなる鞍ガ戸を経て船底へ下り、ここからまた高度を上げて内山にせり上げ、内山では大平山（通称・扇山）に連なる石橋尾根（通称・石楠花尾根）を東に分けて、主稜は塚原越へと高度を下げていく。そして塚原越から伽藍岳への稜線を北に分けて、緩い起伏を重ねながら一旦狸峠の小さな鞍部に下った後、広い草原の山腹を見せる高平山（通称・猫岩山）へともりあがり、大きく緩やかにカーブを描いてアンテナの林立する十文字原の草原へと下っている。

私の高校生の頃、仲間の山屋たち（山友達）との間で、この長大な稜線を『鶴見北尾根』と呼んでいた。高校生時代、貧乏な私にとって遠く県外の山はおろか、九重や由布に比べても手こるで、安い汽車賃で行ける鶴見岳とその北の稜線は、変化に富んだ山行が楽しめる格好のグレンデであった。

昭和三七年暮れにロープウェイが開設されていらい、汗して登りついても、山頂付近はハイヒール姿の観光客を目にするようになり、大いに野趣を損なうようになり、大いに野趣を損なう。しかし山頂から一歩北に踏み込めば、今でももうそこは厳しい自然の中。山屋の世界である。

鳥居から登って十文字原に抜けたら、途中の内山から扇山に下ったり、塚原越から塚原温泉に下って湯に浸かったり、一日で十分に縦走気分が堪能できるし、途中にはいくつもの脇道が



（花の台から内山を望む）



あり、これらがエスケープルートとなつて、天候や体調、時間にあわせて適当に下山も出来る。これらいくつもある脇道ルートを組み合わせれば、無数のバリエーションルートを楽しめる。

また鶴見岳の東側には山上駅に突き上げる桜谷、頂上別山に突き上げる滝ノ谷、噴気口に突き上げる硫黄谷、鞍ガ戸に突き上げる中ノ谷など、鶴見溪谷に向けて幾筋もの険しい谷が山腹を削っている。また、内山溪谷を分け入れば、別府市のような都市の郊外とは思われないほど奥深く、神秘的な深山幽谷のたえずまいを感じ取ることができ

これらいくつもの谷筋を登りつめるのも面白い。今では秘湯の全国区版に登場して有名になりすぎた感もあるが、『なべやまん湯』『へびん湯』などは、昔は山屋しか知らない秘湯で、わざわざ下りルートに選んで、胸おどらせながらひたつたものである。

こうしたいいくつもある『鶴見北尾根』脇道ルートのうち、余り知られていないいくつかのルートを紹介してみよう。

初回の今日は「花の台コース」である。これは鞍ガ戸の北にある小さな広い台地、「花の台」と「船底新道」（昭和三〇年代はじめに由布・鶴見の鞍部、通称猪ノ瀬戸鞍部から船底にかけて敷設された林道で、今では

荒れ果ててしまいい、わずかにその面影程度が残るのみ」とを結ぶ短いルートである。

鞍ガ戸の三角点ピークから内山に向かつて北に縦走路を進むと、急斜面を下ったところがミヤマキリシマの群落の広がる花の台である。ここからさらに北東側のカヤの急斜面を船底へ向かつて縦走路は続くが、花の台から僅かに下ったところに、真西に向かつて別れる小さな踏み跡がある。ノリウツギの小枝に「船底新道へ」と書かれた札が目につくかもしれない。

花ノ台とその北にある小ピークとの間の窪地を、細い踏み跡が樹林をジグザグに縫って下っている。道は余り判然としないところもあるが、目印のテープなどを見落とさなければ迷うことはない。もちろん知る人ぞ知る脇道なので通る人影はほとんどない。

この窪地は、大きな火山岩の累積する谷であるのに、夏は湿つぽく青い苔がいたるところを覆っていて、木立の中の谷間はせまい稜線上にある小谷とは思われないほど、幽玄の気配をただよわせている。

冬の谷間は日照時間も少なく、冬のはじめに降った雪は、今年のように深ければ春まで溶けることはない。白一色の谷間は、冬の晴れ間に通ると明るい光に満ち満ちて、恐ろしいほどの静寂と、青い空と、光の反射

で気が狂うのではないかと思われるような妖しい気持ちに誘われる。

しかしその谷は、冬の北西の季節風の通り道であり、樹林の中でありながら、風の強い時は冬枯れた谷間全体が猛烈な吹きつさらしとなり、地吹雪が舞うところである。

ミズナラやリョウブやウリハダカエデ、ノリウツギなどの中に、湿地の好きなネコヤナギなどが点在する中を、静寂を楽しみながら下ると、好天の日なら十五分ほどで通過し終えるルートである。下ったところは『船底新道』。荒れ果てた林道で、右に行けば二十分足らずで船底へ、左に行けば約五十分で、猪ノ瀬の戸鞍部から鶴見岳の馬ノ背の鞍部へと登るルートに合流する。短いルートであるが、いちど通ればまた行きたくなる道である。



## 今西錦司 ⑤

西 孝子

### 十二支会

今西錦司先生の提案ではじまった山登りの会である。昭和三十五年一月十日、子の泊山が第一回で、本年の犬鳴山が第四十七回を数える。現在約七〇名の会員が全国各地にいる。

全国にある十二支の名の山をさがし、なるべく低い山を選んで登る。テントではなくホテルで前夜祭。参加費千円は通信費である。一年に一回、毎年一月の第二土、日曜日に実施。(当初は一月五日の成人の日に実施)参加すれば日本全国、北海道から九州までぜいたくな旅ができる。

山頂でのお祝いは、還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿、百寿を迎えた人に金一封を渡す。乾杯、万歳で昼食。天候はいとわず。

男性は六十歳以上が正会員、若者は準会員。女性は年齢を問わず全員正会員。今のような長寿国になるうとは思っていないかっただであらう。

六十歳より体力も下降で、大望をいだき地球の高峰を夢見た人も、実際に登った人も、仲良

く楽しくひとときを過ごし、長寿を祝う会である。

今年で九十歳の人はいたい代理の方が受け取ってきたが、今年是一名出席した。健康を願う今年まで、私は二十九回休まずに参加している。

来年は亥年だから大分県の猪群山(国東半島)を皆にすすめたら、会長の御裁可をいただいた。来年一月十三日(土)十四日(日)がその予定日。

これを東九州支部の行事として月例山行にとりいれて頂きたいと考えています。そして、皆さんで参加頂き、また、お手伝い下さいますようお願いしたいと思っております。

みなさん、よかつたらこの会に入りませんか?今西先生は、『人は和だ、愛だ』と常に申しておられました。この心を若者へ、今の世へ伝えたい。これが十二支会の趣旨である。



(山頂での儀式)

# お知らせ

## 二月月例山行のご案内

- ・月 日：二月一九（日）
- ・目的地：古処山（福岡県）  
トサミズキの山旅
- ・出 発：午前五時サニー発
- ・現地集合：甘木IC午前六時  
三〇分
- ・天候次第で馬見山縦走も考えています。
- ・防寒着はもちろんです、念のためアイゼン持参をお願いします。

## 三月月例山行のご案内

- ・月 日：三月一日（土）
- ・目的地：上福根山（熊本県）  
フクジュソウの山旅
- ・出 発：サニー午前五時発  
久連子登山口から岩  
宇土山經由のルート
- ・翌日一二日（日）は蕨野山を  
予定しています。

## 四月月例山行のご案内

- ・月 日：四月九日（日）



（鹿嶋越城山にて）

- ・目的地：御前岳（久大地区）  
日田市前津江）  
マンサクの山旅
- ・出 発：午前五時サニー発
- ・現地集合：日田IC六時ごろ  
とします。

※ 三月は定例総会で決められた  
日の変更になっています。

## 支部役員会のお知らせ

- ・月 日：三月一五日（水）  
午後六時三〇分から
- ・場 所：大分市  
「コンパルホール」
- ・議 題：支部定例総会など

## 安東幹さんの喜寿のお祝い登山会のご案内

安藤幹さんが今年めでたく喜寿を迎えられました。これをお祝いする支部の登山会を五月の月例山行とあわせて実施することになりました。多数のご参加をお待ちしています。

- ・月 日：五月六日（日）  
（七七二・二m）
- ・目的地：横岳
- ・出 発：午前五時サニー出発  
（佐伯市宇目町）
- ・現地集合：木浦小学校前  
午前七時

## 後記

○ 昨年一二月は、例年になく雪の天気が続きました。一月に入って、寒波は続きませんでした。雪はけっこう降っています。

○ 九重や祖母・傾、由布・鶴見などの標高一二、三〇〇m以上のところでは、一二月からずっと雪がなくなることはないようです。このぶんだと春まで溶けることがないと思っただら、このところまた暖かい冬がよみがえってしまっ



たようです。

○ まだ寒のうちというのに、もう庭先ではロウバイの花が満開になっています。ロウバイ（軀梅）の呼び名は、ロウのような質感が花びらにあることからその名が付けられたそうです。

○ しかし「梅」とは縁が遠く、ロウバイ科に属しており、花は葉に先立って開き、直径約二cmで光沢と芳香を持つ黄色い花を横向きまたは下向きに付けます。

別名 カラウメ（唐梅）、ナンキンウメ（南京梅）、英名 Winter sweet

○ 山道にはいると、木陰にありながらシキミやミツマタ、オニシバリなどの芽が動き始めています。

○ 林道の脇の枯れ草の蔭にはフキノトウが固い頭をもたげつつあります。

○ 皆さんの春の山のお便りをお待ちしております。

（K・I）



日本山岳会東九州支部報 第32号

2006年（平成18年）1月25日（土）

発行者 梅 木 秀 徳  
編集者 飯 田 勝 之  
発行所 〒870-0021  
大分市府内町1-3-16  
サニースポーツ内 西 孝子方  
TEL・FAX 097-532-0926  
題字 佐藤正八